入選　高学年の部

お父さんとアイコンタクト

徳島県
徳島文理小学校 四年
小川 康伸

たんしんふにんをきっかけに、お父さんとくらすきょりはぐーんと遠くなったけれど、お父さんを思う気持ちはぐっと近くなりました。いっしょにくらしている時は、何もかもがふつうで、話しも食事も毎日の生活もあたり前のようにすぎていました。

お父さんが高速バスで帰るのを見おくる時、バス一枚のとびらの向こうがずいぶん遠く見えます。

ひさしぶりに会う時は、話しもたくさんするけれど、キャッチボールなどをする時には、ぼくの『あのね！』も目でパチパチ。

お父さんの『そうか！』も目でパチパチ。ボールをなげ合いながら交しんできます。

お母さんには『ありがとう』と言う時があるけれど、お父さんに『ありがとう』はあまり言った事がなかったと思います。

毎日朝早く仕事に行って、ぼくがねたころ帰ってきます。今でもそれは変わりないと思うけれど、たまに会うようになったらお父さんはできるだけぼくと遊んでくれる時間をとってくれるようになったと思います。きっといつも一人で生活しているので、さみしいだろうと思います。

ぼくとお父さんが、キャッチボールやサッカーをしている時、お母さんは食事を作ってくれています。家に帰ると、プーンといいにおいでぼくたちを待ってくれています。

ぼくはこんなあたたかい家族といっしょにいるんだなぁと、ごはんからたちこめるけむりを見ながら思いました。

言葉ならわかること、伝わることはもちろんある。

言葉だけでは、わからないこと伝わらないこともある。でも言葉でなく目だけでも気持ちが伝わることもできるんだと思いました。

これは、ぼくがお父さんを思う気持ち、お父さんがぼくを思ってくれている気持ちが、重なっているからわかるのだろうな。

ぼくは『ありがとう』をお父さんにアイコンタクトにのせて送りました。お父さんも『わかっているよ。今ははなれているけれどおたがいがんばろう』ということをアイコンタクトで送ってくれました。

お母さんに言ったらそれは、「きずながあるからだよ。」と教えてくれました。

『きずな』それは、『たちきることのできない人と人のむすびつき』

お父さんはきっと、いつも遠くからいつもぼくの事を思ってくれているんだろうな。

この作文を書いた後に、お父さんに、「お父さんありがとう。」と大きな声で言ってみようと思います。きっとやさしくアイコンタクトで返事をしてくれると思います。